

〔論文〕

# 年長児の藍の取り組みにおける 「好奇心・意欲」「気付き・学び」の往還過程の分析

田中 みゆき  
Miyuki Tanaka

大阪総合保育大学大学院  
児童保育研究科 児童保育専攻

本研究は、A園の年長児が、藍（草木）を種から育て、すくもづくり、藍染に至るまでの一年間の保育実践を、当時のメモ・記録・動画から本研究のために新たに筆者が書き起こしたものを事例として取り上げ、その実践事例を基に、子どもの言動や姿を「好奇心・意欲」「気付き・学び」のカテゴリーに分類し分析したものである。事例の言動からカテゴリーに属する部分を取り上げ、考察を加えるとともに、「好奇心・意欲」「気付き・学び」がどのように関わり合いながら活動が展開されているのか表にまとめ往還過程の分析を行った。その結果、どの過程においても「好奇心・意欲」「気付き・学び」が一方向の筋道ではなく、往還しながら活動が展開していることがわかった。「好奇心・意欲」「気付き・学び」は、どちらもが子どもにとって「心を動かす情動や心情」であり、それらが行きつ戻りつしながら往還的に繰り返されるからこそ、長期にわたる活動が継続していると考えられる。子どもたちが心を動かしながら「好奇心・意欲」「気付き・学び」が往還過程を辿ることで活動の質が広がり、深まりを増すことがわかった。

キーワード：好奇心、気付き、学び、広がり、深まり

## I はじめに

本研究は、筆者が勤務する京都府下A認定こども園の年長児が、藍（草木）を種から育て、すくもづくり、藍染に至るまでの一年間の保育実践事例の中で見られる子どもの言動や姿を「好奇心・意欲」「気付き・学び」のカテゴリーに分類し分析したものである。その分析を通して、子どもの「好奇心・意欲」「気付き・学び」がどのように関連しあいながら往還過程を辿るのかを明らかにしようとするものである。

秋田（2000）によると、「五感を通しての出会い↔知的な好奇心・関心の喚起↔関わる↔見出す・気付く・考える↔挑む・表す↔たしかめる・振り返る」という筋道を「知のいとなみの展開過程」として示している。また、「この過程は直線的な筋道ではなく、行きつ戻りつしながら、何度も繰り返したり、何日もかかりながら進む往還過程である」という。そこで、筆者はこの往還過程の中の子どもの心の動きの部分、すなわち「知的な好奇心・関心の喚起」と「見出す・気付く・考える」に着目し、それらを「好奇心・意欲」と「気付き・学び」として検討を進める。身近な環境に関わる中で子どもの中に芽生えた「好奇心・意欲」が子どもの行動を促し、その結果、「気付き・学び」が生まれたり、その逆に、何

かを見つけたたり、ちょっとした気付きが子どもの「好奇心・意欲」を引き起こし、それが子どもの行動を促すことにも繋がる。

また、神長（1998）によると、保育者の援助の視点から「感性が揺れ動くことから引き出されてくる知的好奇心、その知的好奇心から生じる主体的な働きかけ、その結果として豊かになる感性といった、感性、知的好奇心、主体的な働きかけという循環の過程をとらえ、適切な援助をしていくことが求められる」「結果的には、保育者と感動体験を共有することにより、子どもの探求心はますます高まり、自然の不思議さにとりつかれていく」と述べている。すなわち、「感性の揺れ動き→知的好奇心→主体的な働きかけ→豊かな感性」という循環の過程を捉えた保育方法を提案している。

本研究で取り上げる「藍の取り組み」の事例は、子どもの活動が一年間という長期に渡って持続し継続していく活動であるが、その過程では「感性の揺れ動き→知的好奇心」といった情動や心情が湧いてくる体験をしている様子が見られた。そのため、その過程で「好奇心・意欲」「気付き・学び」がどのように関連しあっているのか、その過程の中で一連の活動がどのように質的な広がりや深まりが見られるのかを明らかにしようとしている。

平成29年3月に告示された『幼保連携型認定こども

園教育・保育要領』（内閣府・文部科学省・厚生労働省、2017）（以下、「教育・保育要領」と略す）の第1章総則。第2.2.（3）ウにて、「園児が様々な人やものとの関わりを通して、多様な体験をし、心身の調和のとれた発達を促すようにしていくこと。その際、園児の発達に即して主体的・対話的で深い学びが実現するようにするとともに、心を動かされる体験が次の活動を生み出すことを考慮し、一つ一つの体験が相互に結び付き、幼保連携型認定こども園の生活が充実するようにすること」として、「体験の多様性と関連性」「主体的・対話的で深い学び」が位置付けられている。

そこでは「心を動かされる体験」の重要性が指摘され、「教育・保育要領解説」によると「園児は周囲の環境に興味・関心をもって関わる中で、様々な出来事と出会い、心を動かされる。心を動かされるというのは、驚いたり、不思議に思ったり、嬉しくなったり、怒ったり、悲しくなったり、楽しくなったり、面白いと思ったりなど、様々な情動や心情が湧いてくることである。」内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）と説明されている。

まさにA園の藍の取り組み過程では、このような情動や心情が湧いてくる体験が土台となって、子どもの好奇心や意欲が生まれ、その活動を通して「次なる好奇心や意欲」「次なる疑問や気付き・学び」に繋がると考えられる。そのため、「心を動かす・動かされる」という視点にも注目したい。このような過程を支えるためには、指導計画を超え、子どもたちの姿や思いを瞬時に保育環境に取り入れていくことが大切である。そのことによって、子どもにとって主体性が育まれていく生きた体験になっていくと考えられる。

## II 研究目的と分析方法

### 1. 研究目的と仮説

#### （1）研究目的

情動や心情が湧いてくる体験を通して、子どもの好奇心や意欲、さらに主体性が育まれていくことから、年長児の「藍染の一年間の取り組み」の実践事例の分析を通して、活動の中で見られる、子どもたちの「好奇心・意欲」「気付き・学び」は、どのように関連しあひながら往還過程を辿るのかを明らかにするものである。また子どもたちが飽きることなく主体的に活動に取り組むことができる活動の質の広がりや深まりとの関係性を明らかにする。

#### （2）仮説

長期にわたって活動が継続していく過程において、子

どもたちの「好奇心・意欲」と「気付き・学び」の関係は直線的な一方向の筋道ではなく、行きつ戻りつしながら進む往還過程を辿りながら展開しているのではないかと考えられる。また、往還過程を辿る中で情動や心情が湧いてくる体験が絡み合っただけで活動の質に広がりや深まりが生まれるのではないかと考えられる。

### 2. 研究対象

対象者はA園の年長児26名、観察期間は平成26年4月から3月までの一年間である。

### 3. 平成26年度の「藍染の活動」を取り上げた理由

本研究で取り上げた実践事例は、平成26年度の事例であるが、その理由は次の2つである。1つ目は、A園では、年長児が日々の保育活動の中で「自然から色をいただけ体験」として草木染を行っていた。子どもたちが染めた布の中に青色がないことに気付いたことから「藍染の活動」が始まり、1年継続して取り組む姿が見られたことが挙げられる。2つ目は、2016年度がこの活動開始の初年度であり、藍染職人の方など保育者以外の方からの学びをうけ、その実践記録はメモも含め丁寧に保管がされていた。事例の抜けや漏れがほとんどないことから、それらの資料をもとに実践事例の考察や分析が行いやすいと考えたためである。

### 4. 分析のカテゴリーと分析方法

#### （1）分析のカテゴリー

表1に示すように本研究では子どもの言動や姿を「好奇心・意欲」と「気付き・学び」の大きく2つのカテゴリーに分類して分析を行う。

1つ目の「好奇心・意欲」については子どもたちの活動の展開過程において、新たな展開が生まれていくきっかけとなるものを「出発点となる好奇心や意欲」とし、具体的に「～したい」といった子どもなりの目的やめあてが明確になっているものを「目的をもった好奇心や意欲」として2つの要素を含めている。

2つ目の「気付き・学び」については、子どもたちが何かに出会った時に気付いたことが出発点となり、そこから新たな展開が生まれてくるものを「出発点となる気付き」とし、実際に取り組む中で、やってみた結果気付いたこと・取り組んだ結果得た学びを「結果としての気付きや学び」としている。また、以前の経験やすでに知っていることと結びついた気付きや学びを「結びついた気付きや学び」としている。これら以外に「他の情報を基にした学び」もあるので、「気付き・学び」には4つの要素を含めている。

表1 分析カテゴリー

| カテゴリー  | カテゴリーに含まれる要素  |
|--------|---|
| 好奇心・意欲 | 出発点となる好奇心や意欲<br>目的をもった好奇心や意欲  |
| 気付き・学び | 出発点となる気付き<br>結果としての気付きや学び(取り組んでみた結果得たもの)<br>結びついた気付きや学び(経験や知識と結びついて得たもの)<br>他の情報を基にした学び |

本研究においては、活動展開における「好奇心・意欲」と「気付き・学び」の往還過程について明らかにすることが目的であるため、カテゴリーの要素に含まれる「学び」の具体的分析は行っていない。

## (2) 分析方法

### ①本研究で扱う事例について

本研究では、藍(草木)を種から育て、すくもづくり、藍染に至るまでの一年間の年長児の取り組みのプロセスを9つの時期に分けて、事例1『種蒔き』、事例2『定植』、事例3『水やり・草抜き・害虫探し』、事例4『藍の葉の刈り取り』、事例5『葉の乾燥』、事例6『すくもづくり』、事例7『藍建て』、事例8『藍の攪拌』、事例9『藍染』として事例を整理した。各事例には、ある一日の事例(事例2、事例4、事例9)と、継続した期間の事例(事例1、事例3、事例5、事例6、事例7、事例8)の2つのタイプがある。

### ②事例の書き起こしについて

上記の9つの事例は、その当時のメモ・記録・動画を踏まえて、本研究のために新たに筆者が書き起こしたものである。書き起こしについては、クラス全体、もしくは少人数での活動に焦点を合わせているため、個々ではなく集団の営みとして取り上げている。そのため、子どもの言葉や姿もある特定のA児のものとしてではなく、そこに居合わせた子どもの発言や姿として取り上げている。

③事例中の子どもたちの発言や姿などにおいて、表1の分析カテゴリーに当てはまるものに下線を引き、順に(ア)(イ)…と表記し考察を行う。

④事例中の子どもたちの言動や姿を読み取り、表2-1から表2-9の「好奇心・意欲」「気付き・学び」の往還過程の表にまとめ、分析を行う。

## Ⅲ 実践事例とその考察

### 1 事例1『種蒔き』

(1) 事例1は、藍の取り組みの出発点となる色染めについてのミーティングから、藍の種蒔きまで、4月8日から4月11日までの子どもたちの事例を示す。

①4月8日、クラス全員の集まりの様子から

毎朝、クラス全員で行う集まりの時間では、子どもたちの興味・関心の話をしたり、聞いたりしながら、仲間と共有し、その日のあそびの内容を保育者とともに計画していく。最近、草木染を楽しんでいた子どもたちのために、保育者が作った草木染の手作り図鑑を見ていた時のことである。子どもたちは、図鑑のページをめくりながら次はどんな色の染めをしたいかを話し合っていた。(ア) 子どもたちは口々に「あかいろがいい!」「みどりがいいなー」等とつぶやいていた。そんな中、(イ)「あおいろないやん!」と草木染図鑑の中に青色がないことに気付いた子どもがいた。他の子どもたちも「ほんまや」と図鑑のページをめくる姿が見られた。保育者はそのことを知っていたが、すぐに答えを出すのではなく、子どもたちが自ら考えることができるように「ほんまや、青がないなあ」「調べてみたら?」と図鑑や絵本などを提供してみた。(ウ) 子どもたちは、「よっしゃー!」などと言いながら、やる気の表情を見せている。みんなで話し合い、どのような素材から青色が出るのか調べてみることになった。

そして、図鑑や本、インターネット検索による資料などにより「藍」という植物から青色が出ることがわかった。(エ)「あいがあおいろになるってー」(オ)「あいほしい!」「あいであおいろそめたい!」「でもあいってどこにあるん?」とつぶやく子どもたち。子どもたちと一緒に保育者も参加し色々話し合いを行った結果、藍の種がどうしたら手に入るのか園長に相談してみようということになった。呼び出された園長はさりげなく藍染の布を身につけながら子どもたちの前に現れた。子どもたちは(カ) みんなで顔を見あわせながら「あいください!!」と叫んだ。そして園長が身につけていたものを見て、(キ) すかさず「あっ!それ、あい?」と言い当てた。他の子どもたちも、じっと見ている。子どもたちの藍への好奇心の高まりを感じていた園長は、子どもたちから、「青色」について声がかかることを予想

し、事前に子どもたちには内緒で福知山にある藍同好会のHさんと連携し藍の種を譲りうけていた。このような経緯からすぐに子どもたちに藍の種を見せることができた。「この種をあげるから、藍を育てて藍染してみたら!？」と提案すると(ク)「うん!あ、い、そだてる!!」「ありがとう」と嬉しそうに子どもたちは飛び跳ねた。全身で嬉しさと期待感を表していることが窺える。

②4月11日「種蒔き」の様子から

そして早速、種蒔きをすることになった。袋から出てきた(ケ)小さな藍の種を見て「ちっさー」「かぜでとばされちゃうで!」と藍の種を心配する子どもたちの姿が多く見られた。黒色のポリポットに培養土を入れ、種を3粒ずつ受け取り土の上に蒔く。(コ)「(種を)ぎゅっでもっとこ」と種が風に飛ばされないように、つぶやきながら種蒔きを終えると、次は水やりである。(サ)「(種が)ながされちゃうから(水を)やさしくあげよ!」と声をかけ合いながら水やりをする姿が見られた。

気持ちとの向き合い(思い)であり、またその思いを叶えるためにどうしたら良いのかと思考する言動である。これは、目的をもった好奇心や意欲の表れといえる。

このように、事例の前半部分は、素朴な色への関心から藍が欲しいという目的を持った意欲へ子どもの好奇心・意欲が質的に高まっているといえる。

そして、藍の種を手に入れていく場面以降の(カ)～(ク)では、園長が身にまもっていた藍染の布の存在に気付き、「藍の種」を実際に手に入れた。(ク)では、保育者の提案を受け、「うん!あ、い、そだてる!!」とその活動を継続的に行っていきたいという好奇心と意欲の表れが見られ、さらなる意欲に繋がっていていることが窺える。

また、その活動の中で(イ)の「あおいろないやん!」のつぶやきに見られる、図鑑の中に青色に染まる植物がないことの気付きは、今後の様々な活動に繋がる出発点となる気付きといえる。

活動の一つ一つの中で、何かに気付き、そのことに好奇心をもち探求していく中で、(エ)のような「あいがあおいろになるってー」という新たな気付きに出会う。これは、探求したからこそ味わうことができた結果としての気付きであるといえる。

②4月11日「種蒔き」の様子から

(ケ)では藍の種を見て「ちっさー」と大きさに気付いている。これは、藍の種を実際に手にとってみたことによって、それまでの経験や知識と結びついた気付きに深まっている。

その気付きから(コ)の「ぎゅっでもっとこ」という工夫に繋がっており、これは握っていれば飛ばされない

(2) 事例1の考察

①4月8日、クラス全員の集まりの様子から

種蒔きの事例1では、(ア)(ウ)(カ)において、「あかいろがいい!」「よっしゃー!」「あいください」という自分の思いややる気を感じさせる言動が見られる。これは、活動の出発点となる好奇心や意欲の表れといえる。(オ)は、「あいほしい!」「あいであおいろそめたい!」「でもあいつどこにあるん?」と自分がやりたい

表2-1 事例1の「好奇心・意欲」「気付き・学び」の往還過程

|                      | 好奇心・意欲        | 気付き・学び               |
|----------------------|---------------|----------------------|
| ①4月8日、クラス全員の集まりの様子から |               |                      |
| ア                    | 染めたい色         |                      |
| イ                    |               | 図鑑に青色の布がない           |
| ウ                    | やる気の表情        |                      |
| エ                    |               | 青色になる素材を知る           |
| オ                    | 染めたい、藍が欲しい    |                      |
| カ                    | 仲間と思いを伝える     |                      |
| キ                    |               | 藍染の作品に気付く            |
| ク                    | 藍を育てる         |                      |
| ②4月11日「種蒔き」の様子から     |               |                      |
| ケ                    |               | 「ちっさー」(種の大きさ)風で飛ばされる |
| コ                    |               | 「ぎゅっでもっとこ」(工夫)       |
| サ                    | 水やりの注意点を声かけあう |                      |

という学びと捉えられる。さらに(サ)では、新たに水やりの中で、勢いよく水をやると種が流れてしまうという現象に気付いている。

以上を踏まえると、表2-1のような「好奇心・意欲」「気付き・学び」の往還過程として表すことができる。このように子どもの行動・思いの時間的変化の中で、「好奇心・意欲」と「気付き・学び」が行きつ戻りつしながら展開されていることがわかる。

## 2 事例2『定植』

(1) 事例2は、子どもたちの藍の生長による気付きから、広い場所へ定植することになった5月8日の取り組みの事例を示す。

種蒔きから1か月が経過し発芽した藍が生長してきた。子どもたちは「おおきくなってきたなあ」と眺めながら、芽が密集して生えていることに気付き(ア)「せまくてかわいそう」と言い出した。そんな子どもたちの呟きから、クラスで相談しポリポットから畑へ藍の定植をすることになった。保育者から①から⑥の定植方法の説明を受け活動が開始する。①約15cmの丈に育った藍の苗を土から引き抜く。前年度野菜の苗を植えた時、なるべく根を崩さずそっと植えるというやり方を覚えていたためか(イ)「抜いていいの?」と心配そうにたずねてくる姿も見られた。(ウ)根が切れないようにゆっくりと苗を引き抜く姿はこれまでの栽培体験が反映した姿といえる。②引き抜いた苗を5本ずつ束ね、根同士と土が絡まるように、根元をギュッと握ってまとめる。その際も(エ)「1、2、3、4、5」と呟きながら行う姿が見られた。③畝に植える際は、株と株の間を50cm間隔で植える。(オ)「50cmってどれぐらい?」という発言から、事前に「50cm」に親しむ話をクラスで行い、子どもたちと50cmを図りながら切った紐をいくつも用意しておいた。子どもたちは(カ)自分で距離を測りながら、「ここが50cmや」と苗の間隔を決めていった。④土を根の上に被せる前に、根元にオルトラン(害虫除去剤)を約1g蒔く。薬剤であるため、子どもたちの「せんせい、くすりまいて!」の声で保育者が蒔いた。⑤オルトランが蒔かれたら根の上に土をかぶせ、土の上から根元をかかとで踏みしめる。(キ)「ほんまにふんでもだいじょうぶ?」と藍の苗を心配し踏む行為を確認する姿は「踏む」という方法に対しての好奇心からくる姿といえる。「藍の根っこが土と仲良しするためやから大丈夫。しっかり踏んどいたら大きく育つよ」と保育者

が言うと、(ク)「そっか」と納得したように踏みしめる姿が見られた。その際、葉までも踏んでしまわないように、足先に神経を向けながら慎重に踏みしめる姿は、藍に対してのいたわりの気持ちであるといえる。⑥最後の仕上げは水やりである。(ケ)「ごっくんごっくんっていつてるでー」と水が土に吸い込まれていく様子を、まさに藍の苗が水を飲んでいくかのように表現する姿や「おおきな〜れ」と口々に苗に話しかけながら水をやっている姿が見られる。(コ)「おぼれたらあかんし」と水が土に吸い込まれていくのをじっと待ちながら、少しずつ丁寧に水やりをする姿も見られていた。

### (2) 事例2の考察

(ア)の「せまくてかわいそう」という呟きは、自分たちが蒔いた種が発芽し、ぎっしり詰まって生えている様子から聞かれた言葉である。つまり取り組んでみた結果として気付いた気付きといえる。(イ)では折角生えた苗を抜くという目的をもった活動に対して、本当に抜いて大丈夫かな?と好奇心を高め、自ら確認にくるという積極的な姿へと繋がっている。そしてその結果として、今までに体験してきた野菜の栽培で得た学びを活かし、(ウ)の根が切れないようにゆっくりと苗を引き抜くという行為に結びついている。

また、(エ)の「1、2、3、4、5」と持っている知識を使い数を数える姿や、畝と畝の間の距離を測るという活動から、(オ)の「50cmってどれぐらい?」という好奇心や意欲の広がりを見せている。そして実際(カ)のように「ここが50cmや」と自ら測り、50cmという長さについて気付く様子が見られている。活動の中で、(キ)のような「ほんまにふんでもだいじょうぶ?」という、藍ならではの踏むという定植方法についての言葉も、これまでの体験と異なることからくる好奇心の表れといえる。(ク)の「そっか」という新たな学びから、より納得のいく深まりを見せているといえる。(ケ)(コ)の自然現象についての気付きや学びも、体験することを通して、人間である自分たちと重ね合わせながら心を動かし、試行錯誤しながらより良い対応方法を学んでいるといえるのではないだろうか。

以上を踏まえると、表2-2のような「好奇心・意欲」「気付き・学び」の往還過程として表すことができる。このように事例1同様に、子どもの言動・姿が時間的変化の中で「好奇心・意欲」「気付き・学び」を行きつ戻りつし、相互作用しながら展開されていることがわかる。

表2-2 事例2の「好奇心・意欲」「気付き・学び」の往還過程

|   | 好奇心・意欲         | 気付き・学び      |
|---|----------------|-------------|
| ア |                | 芽が密集して生えている |
| イ | 苗を抜いていいの？      |             |
| ウ |                | 根が切れないように抜く |
| エ |                | 数を数える       |
| オ | 50 cm ってどれぐらい？ |             |
| カ |                | 50 cm を図る   |
| キ | 他の植物の方法と違う     |             |
| ク |                | 藍の定植方法      |
| ケ |                | 土に水が染み込む様子  |
| コ |                | 水やりの方法      |

### 3 事例3 「水やり・草抜き・害虫探し」

(1) 事例3は、苗の定植後、毎日のように取り組んだ水やり・草抜きの活動の中で見られた虫との出会いがあった6月19日の取り組みの事例である。

①「毎日の水やり」「雑草抜き」の様子から（6月19日までの様子）

毎日の水やりでは、「あかちゃんがおぼれないように」と藍の苗を赤ちゃんに見立て、(ア)土が水を吸い込む様子を見つめながら、慎重に水やりをする姿が見られていた。

定植を終えしばらくすると、畝に雑草が生え始めた。野菜作りの際にも雑草抜きを経験している子どもたちは、雑草が生えたら栄養が藍の葉にいかないことを知っているようで、(イ)「たいへんや！あいさんおおきくなれへん！」と言いながら雑草抜きを行っていた。子どもたちは、いつしか藍のことを「あいさん」と呼ぶようになった。そして、藍さんのお父さん・お母さんは自分たちであると言い出した。藍の赤ちゃんのためにと、(ウ)雑草抜きも面倒がることもなく、意欲的に取り組んでいる姿が見られていた。

②6月19日「虫との出会い」の様子から

その日、子どもたちは葉の一部が先端の部分だけクシャクシャとなりうな垂れているのを見つけた。(エ)「かれてる！」「なんで？」と口々にその状態を仲間や保育者に伝え不思議がっている。「なんでかれたんやろうな？」と言いながら、保育者はその枯れている藍を摘んでみた。藍の茎の中に虫がつく場合があること、虫が茎の内部を食べると枯れてしまうことを保育者は事前に調べ知っていたが、あえて何も言わず子どもたちと一緒に不思議がって様子を見た。(オ)子どもたちは、摘み取られた茎を慎重に観

察していたが、(カ)一人の子どもが「あなあいてる！！」と茎に小さな穴があることに気付いた。穴の周りには糞のようなものもある。「えー！？」と周りの仲間も驚いて茎を覗き込んだ。穴を見つけた子どもが、(キ)穴の部分から茎を裂いてみると、中から小さな虫が出てきた。「むしや！」と叫んだ。(ク)他の子どもたちも「たいへんや！」「あいぞめできひんくなる！！」と一同がワイワイと騒ぎだし、すぐに事件となった。他にも枯れた葉がないかみんなの調査が始まった。枯れた葉は他にもいくつか見つかった。子どもたちは枯れてしまった葉を見つけ、「これもや！」「これもかな？」と仲間と相談しながら取り除いていった。

(2) 事例3の考察

①「毎日の水やり」「雑草抜き」の様子から

藍を育てる活動が開始し、種を流さないように気をつけながら毎日のように水やりする中で、(ア)のような慎重に水やりする姿が継続して見られた。これは、藍を育てたいという意欲と捉えることが出来るのではないだろうか。これまでに体験してきた栽培活動との比較から、苗の周りに生い茂ってきた雑草に対して(イ)の「たいへんや！あいさんおおきくなれへん！」という気付きとなり実際に雑草を抜く活動に繋がっている。これまでの経験と結びついた気付きという捉え方もできるが、以前の経験を踏まえ、雑草は抜かないと藍が育たないという学びに繋げていることから、ここでは継続して藍を育てるという活動を行っているからこそ、いつもの「違い」に気付き、これまでの経験での学びと結びついたと考えられる。そして藍のことを(ア)「あかちゃんがおぼれないように」と言ったり、(ウ)「あいさん」と敬称を付けて呼んだりするなど、藍という存在に対し

て親しみと愛情を高めてきていることが窺える。

②6月19日「虫との出会い」の様子から

(エ)では、青々といつもピンとした葉をつけている藍の葉が、クシャクシャに乾燥しうな垂れてしまっている様子から「かれてる！」という言葉が聞かれている。そこから「なんで？」という新たな疑問が生れていることから、この気付きは出発点となる気付きと位置付けることができる。

また、一人が感じた発見や気付きが仲間に伝わり、好奇心・探求心の共有化が図られていることが、(カ)の「あなあいてる!!」という、また別の子どもの発信からわかる。疑問から好奇心・探求心が深まり「なぜだろう？」という気持ちからより観察力が高まったといえる。その結果として茎に穴が開いていることに気付いたのである。普通は開いていない茎の穴に何があるのだろうか？と増々好奇心・探求心・期待が深まっていることが窺える。(キ)では、実際、子どもたちが枯れて穴の開いている茎を裂いて行動に移している。「むしや!」という藍の虫との出会いは、新たな発見である。藍の葉が枯れている時は、茎をよく観察すると穴が開いており、その中には虫が潜んでいるのだ。ドキドキ、ワクワクと心を動かしながら探究し体験したことで気付きが生まれ、広がり、学びに繋がったといえる。様々な思考が巡る中で、葉が枯れる＝葉の収穫が出来なくなる。つまり目的である藍染が出来なくなるのではないかという予測にまで思考が至っていることが分かる。これは、本当に藍染はできなくなるのか？という新たな出発点となる気付きといえる。

また、その過程を仲間と一緒に取り組むことで、気付きや発見を共感しあえ、より好奇心の高まりへと繋がっていることは、子ども同士の会話や行動の様子から読み取ることができる。

以上を踏まえると、表2-3のような「好奇心・意欲」

「気付き・学び」の往還過程として表すことができる。この表からは、藍が生長し変化していく様子に子どもたちが関わる中で、様々な気付きや学びがみられた。新しい気付きがあるからこそ、慎重になるという好奇心・意欲の姿に繋がっていると捉えられ、往復的に関わり合いながら広がりを見せているといえる。

#### 4 事例4『藍の葉の刈り取り』

(1) 事例4は、一番藍を刈り取った7月23日の事例を示す。

藍は一番藍、二番藍、三番藍という言い方をする。つまり3回刈り取りをするのである。

そのため、茎を根元から刈り取るのではなく、次の藍を育てられるように新芽を残しながら刈り取らなければならない(根元から約20cmの部分)。ついに、藍の葉が大きく育ち、一番藍を刈り取る時がきた。(ア)子どもたちは朝から「きょう、あいとるねん」と期待感を隠せない様子である。藍の畑へ到着した子どもたちは早速、畝の周りに集まって、保育者から茎の根元から20cmを残して刈り取っていくことを教えてもらった。(イ)「20cmって、これぐらいいやな」と長さを見比べたり、(ウ)はさみを握り、「うえをもってしたをきる」と怪我をしないように、はさみの使い方に注意しながら一本一本丁寧に刈り取っていく姿が見られた。刈り取った藍は、あらかじめ用意しておいた段ボール箱に入れていく。そして刈り取り後はすぐに葉の色の選別を行いながら茎から葉だけを摘み取り集めていく。段ボールを横半分に切ったものに新聞紙を敷き、その中に緑色の葉だけを集めていくのである。(エ)「なんで みどりののはっぱだけ いれんの？」と疑問に思う子どもたちに、保育者が赤色やオレンジ色の葉は染めが出来

表2-3 事例3の「好奇心・意欲」「気付き・学び」の往還過程

|   | 好奇心・意欲                           | 気付き・学び      |
|---|----------------------------------|-------------|
| ① | 「毎日の水やり」「雑草抜き」の様子から (6月19日までの様子) |             |
| ア | 慎重に水やりする姿                        |             |
| イ |                                  | 雑草が藍の成長を妨げる |
| ウ | 面倒がらずに取り組む姿                      |             |
| ② | 6月19日「虫との出会い」の様子から               |             |
| エ |                                  | 葉が枯れている     |
| オ | 慎重に観察                            |             |
| カ |                                  | 茎の穴を見つける    |
| キ |                                  | 茎の中に虫を発見    |

ないことを伝えた。真剣な表情で選別をする子どもたち。始めは一枚一枚葉を摘んでいた子どもたちであるが、時間と共に(オ)「じょうずになってきたで〜」「みて〜！」と言いながら茎をなでるような手つきで器用に一気に葉を落としていた。一枚も無駄にしないように落ちた葉を大切に拾う姿も見られた。(カ)「これみどり、これあかや！」と色の違いを仲間同士伝えあいながら楽しそうに選別している。子どもたちだけでは到底全ての藍を刈り取ることは出来ないため、保育者も総動員で手伝う。大変さと喜びの共有である。葉の刈り取りや選別を手伝う保育者に(キ)「てつだってくれてありがとう！」と声をかける子どもがいた。その声を聞き、次々に真似て「ありがとう」とお礼を言う子どもが増えていった。

(2) 事例4の考察

継続して育ててきた藍の刈り取りを初めて行う意欲や喜びが(ア)の「きょう、あいとるねん」という子ども自らが伝えずにはいられない姿から窺える。(エ)では、「なんで みどりののはっぱだけ いれんの？」という疑問を保育者へ投げかけている。緑・黄・赤と色は違えども藍の葉には変わりがないではないかという、素朴な疑問の声が聞こえてきそうである。これは、葉の摘み取り＝藍染という繋がりから藍染という目的をもった好奇心・意欲と捉えることができるのではないだろうか。

また、(イ)の「20cm って、これぐらいやな」という長さについてのイメージや知識、(ウ)のはさみの扱いは、今までの経験や知識が結びついたことによる学びであるといえる。特に(カ)の「これみどり、これあかや！」という色に対する認識は、絵の具のような鮮明な色の認識とは異なり、自然界における色であり、その微妙さを選別できる能力は、本来の色に対する認識がしっかりできているからこそ可能であるといえる。活動を通して、様々な道具にも親しむ中で、(ウ)のはさみ

の扱いでは、紙を切ることは勝手が違うため、より慎重に、はさみの特性や扱い方を知っていないと怪我に繋がってしまう。一見、危なそうに見える道具の扱いも、自らやってみてわかること、仲間と一緒に活動を通して、見て学んだり、互いに伝えあったりして学びを深めていることがわかる。(オ)の「じょうずになってきたで〜」「みて〜！」という声は、葉の摘み取りをしていく中で、上手に摘み取る方法やテクニックの向上が見られ、活動に対しての満足感や自信の高まりから生まれた姿といえるのではないだろうか。

そして、その体験や感動を共有・共感してきている保育者に対して、(キ)の「てつだってくれてありがとう！」という感謝の言葉が自然に口から出ている。生きた体験の中にある、大変さの共有と心を共に動かしてきたからこそ生まれる言葉であり、人と人とが関わり合う中で重要な学びに繋がったといえる。

このように、活動を継続的に取り組むからこそ好奇心・意欲から気付きや学びが生まれ、学ぶからこそ次への好奇心・意欲に結びついているといえる。また活動を重ねることにより、周りに対する感謝の念や道具への愛着・操作性の高まりへと学びが広がっているとも捉えられるのではないだろうか。

以上を踏まえると、表2-4のような「好奇心・意欲」「気付き・学び」の往還過程として表すことができる。この表を見ると、「気付き・学び」が多く見られる。その中で「好奇心・意欲」との行きつ戻りつする往復が見られている。

5 事例5『葉の乾燥』

(1) 事例5は、7月23日に行った藍の刈り取り後と、7月25日の葉を乾燥させるという工程についての事例を示す。

①7月23日「葉の刈り取り」後の様子から刈り取りを終え、次の工程として、茎から摘み

表2-4 事例4の「好奇心・意欲」「気付き・学び」の往還過程

|   | 好奇心・意欲      | 気付き・学び    |
|---|-------------|-----------|
| ア | 刈り取りへの期待感   |           |
| イ |             | 20 cmを知る  |
| ウ |             | はさみの扱い    |
| エ | 葉の選別についての興味 |           |
| オ |             | 葉の摘み取りの上達 |
| カ |             | 葉の選別      |
| キ |             | ありがとうの気持ち |



取った緑の葉を天日干しで乾燥葉にする必要があり、強い日差しにしっかりとあてると、約3日間で乾燥葉ができることを保育者は子どもたちに伝えた。

保：「いっぱいお日さまが当たるところってどこかな？」

子：「ん～？」と考え込み、周りを見渡す。

子：(ア)「あ！！さくらさん（2歳児クラス）のうえは！」と屋上を指さして教える。

2歳児クラスの部屋の上は屋上であり、子どもたちは稲作りもその場で進んでいた経験があるため、その場所をイメージし、提案するに至ったと考えられる。子どもたちは口々に(イ)「いいな～」「あそこやったらずっとおひさんあたってるしな」と仲間の提案に賛同していた。葉を干す場所が決まったので、早速、段ボールの中に入った緑の葉を子どもたちが運ぶことになった。(ウ)「はこ おおきいしひとりやったらむりや」「いっしょにもとう」と仲間と協力しながら屋上に運んで行く。大きな箱ゆえに持つ場所や狭い階段を上がる方法をあれこれ工夫しながら運んでいく姿が見られた。屋上に運ばれた藍の葉は、子どもたちに揺さぶられ箱の隅に固まってしまっている。保育者は子どもたちに「藍の葉っぱは、みんなたくさんお日さまがあたるようになってるかなあ？」と言ってみた。その言葉かけを聞いて子どもたちは箱の中を見直した。(エ)「あかん、したのほうはおひさんあたらへん」と気づき、箱の片隅に寄ってしまった葉をまんべんなく広げる姿が見られ出した。みんな次々に真似をしている。その日から子どもたちは、天気を気にしながら乾燥葉が変化していく様子を観察した。

②7月25日の「葉の乾燥」の様子から

数日後、強い日差しの中、屋上で乾燥させている葉を観察している子どもたちに保育者が質問した。保：「葉っぱ どうなってる？」子どもたち：(オ)「ばらばらなってる！」「いろかわってる！」「いいにおいするで～」「あったかい～」と口々に気づきを言葉にして伝えあう姿が見られた。仲間の気づきもうなずきながら聞いている。乾燥している葉の様子を、視覚から色や形の変化に気づき、嗅覚からにおいを感じ、触覚から温かさやざらざらした感触を味わっていた子どもたちである。

## (2) 事例5の考察

①7月23日「葉の刈り取り」後の様子から

葉を乾燥させるためには、しっかりと天日に干さなけ

ればならない。当然、よく日が当たり、他クラスの保育活動の妨げにならない場所を保育者は思いついたが、あえて先んじて子どもたちに適した場所は伝えず、一緒に考える機会を与えている。「いっぱいお日さまが当たるところってどこかな？」という保育者からの投げかけにより、子どもたちは、今までの体験を思い出したり、他児と話をしたりしながら、その答えを探していく。(ア)の「あ！！さくらさん（2歳児クラス）のうえは！」という提案は経験や知識と結びついた気づきの共有とすることができる。(イ)「いいな～」「あそこやったらずっとおひさんあたってるしな」という仲間の意見に対しての賛同は仲間との一体感を感じたい意欲的な発言と捉えることが出来るのではないだろうか。このように、目的意識を持ち、考えや思いを仲間と共有することで、これまでの体験や経験の知識とより一致させ、気づきや学びが広がっているといえる。

実際、大きな段ボール箱を園舎屋上に運ぶ際には、当然一人では抱えられず、おのずと仲間との協力の必要性が生まれた。大きな段ボール箱をコントロールしながら狭い階段を上ることは年長児にとって容易なことではない。下手をすると、中に入っている苦労して摘み取った葉をこぼしてしまうことになるからである。(ウ)の「はこ おおきいしひとりやったらむりや」「いっしょにもとう」と、どの辺りを持って安定するのか、どの高さで維持すればみんなが持ちやすいのかなど、仲間と試行錯誤しながら運ぶ姿は活動に対しての意欲の表れであるといえる。(エ)においても、運び終わって満足している子どもたちに対して、保育者は「藍の葉っぱは、みんなたくさんお日さまがあたるようになってるかなあ？」と質問を投げかけている。そうすることにより、子どもたちの視線は一斉に段ボール箱内の藍の葉に向けられた。「あかん、したのほうはおひさんあたらへん」という気づきののち、考え試しながら、葉をまんべんなく広げ、一番良いと思われる方法を導き出している。

②7月25日の「葉の乾燥」の様子から

このように自分たちで考え、工夫して行う活動は、常に子どもたちの意識の中に存在し続け、心を動かしているといえる。だからこそ、乾燥葉を目にしたとき(オ)の「ばらばらなってる！」「いろかわってる！」「いいにおいするで～」「あったかい～」と五感をフル活用して気づいている姿が見られるのではないだろうか。これは、取り組んでみた結果としての気づきということができると考える。

以上を踏まえると、表2-5のような「好奇心・意欲」「気づき・学び」の往還過程として表すことができる。この表では、「好奇心・意欲」と「気づき・学び」が大きく

表2-5 事例5の「好奇心・意欲」「気付き・学び」の往還過程

|                      | 好奇心・意欲    | 気付き・学び       |
|----------------------|-----------|--------------|
| ①7月23日「葉の刈り取り」後の様子から |           |              |
| ア                    |           | 日がよく当たる場所    |
| イ                    | 友達の見解への共感 |              |
| ウ                    | 仲間との協力    |              |
| エ                    |           | 日が当たっていない葉   |
| ②7月25日の「葉の乾燥」の様子から   |           |              |
| オ                    |           | 乾燥葉の色、におい、状態 |

往復していることがわかる。

### 6 事例6『すくもづくり』

(1) 事例6は、10月21日に行った「すくもづくり」から、すくもが完成した11月13日までの活動における事例を示す。

#### ①10月21日「すくもづくり」の様子から

準備するものは、乾燥葉(5kg)、90ℓのポリバケツ、前日から汲み置きした水6.5ℓ。子どもたちは他クラスの保育者たちに(ア)「すくもつくるねん」と言いながら、うれしそうに部屋に集まってきた。子ども二人がかりで乾燥葉が入った大きな米袋を抱え、空っぽのポリバケツの中に乾燥葉を入れていく。その中に水を少量ずつ入れながら葉がしっとり濡れるように攪拌していく。子どもたちはポリバケツの中に頭ごと突っ込み、両手で葉を抱えるようにしながら攪拌していく。(イ)葉が湿ってくると「いいにおい」「おちゃのにおいする」「やきそばのにおいや」など、子どもたちは口々ににおいの気付きを言い合っていた。誰も発言したことを否定せず、ケラケラ笑ったり、あいづちをうったりして楽しそうである。二人ずつ順番に攪拌するため、待っている子どもたちは(ウ)「1、2、3…10」と攪拌回数を数えたり、ポリバケツからこぼれ落ちた乾燥葉をバケツの中に拾い集めたりする役を誰が言うともなくかってでている。全体がしっとり湿ってくるには約30分を要する。攪拌開始から30分がたつ頃、保育者が攪拌している子どもたちに言葉をかけた。「どんな感じになってきた?葉っぱはみんな湿ってきたかな?」すると、攪拌していた子どもが、(エ)「なんかはっぱがあっただかくなってる」と言い出した。その声を聞き、他の子どもたちも「えー!?!」と声を上げ触りだした。乾燥葉が水で発酵を始めると発熱してくることを保育者は知っていたが、あえて何も

言わずに子どもたちと一緒に不思議を楽しんだ。保育者は、どのくらい温かいかわかる方法として「温度計」というものがあることを子どもたちに伝えた。(オ)子どもたちは温度計に興味を持ち「測ってみたい」と言い出した。

#### ②その後の「攪拌」の様子から(すくも完成まで)

すくもづくりの活動日から、毎日同じ時間に藍の葉を攪拌する活動が始まった。その際、温かく感じるという子どもたちの気付きから、攪拌の前後に温度計で温度を測ることになった。毎日ポリバケツ内の葉の温度を測るものの、葉から温度計を取り出すと、すぐに温度計のメモリが下がるため(カ)「さがっていくー」「わからへん」とメモリを見慣れない子どもたちにとっては読み取りが難しいようであった。そこで保育者は、温度計と同じ手作り温度計を紙で作成し、メモリが指す温度を書き写すことで、ゆっくりとメモリの読み取りができるようにした。(キ)「きのうよりあつくなってる」という子どもたちの呟きから、その温度と乾燥葉が変化していく様子を表とグラフにしてまとめることになった。表とグラフの土台作りは保育者が行ったが(ク)「53ってここやんな?」「だんだんあつくなってる、なんどやる?」と温度を測ったり、色を塗って棒グラフに仕上げたりしてまとめる作業は子どもたちが行った。(ケ)「くさいなあー」「なっとうのにおいする」「バケツがあせかいてる」と発酵により日に日に変化していくにおいや状況の変化への気付き、発酵臭によってくるショウジョウバエの捕獲殺虫した数の記録など仲間同士で話しながら表にまとめていく姿が見られた。

#### (2) 事例6の考察

##### ①10月21日「すくもづくり」の様子から

(ア)の「すくもつくるねん」という呟きは、すくもづ

くりに対してワクワクと期待感を高め、抑えきれない気持ちの表現であり「出発点となる好奇心・意欲」と捉えられる。

すくもづくりが始まり、乾燥葉に水を加えることによって変化が見られてきた。(イ)の「いいにおい」「おちゃのにおいする」「やきそばのにおいや」というにおいに対するの眩きは、水を加えることで結果として結びついた気付きであるといえる。(ウ)の自分の順番が来るまでの間、数を数えたり、こぼれ落ちた乾燥葉を拾い集めるなどの姿は、何か関わってみたいという意欲の表れであり、目的をもった好奇心・意欲であると考えられる。また、(エ)の「なんか はっばがあったかくなってる」という気付きも実際取り組んだ結果として気付いたものといえる。

②その後の「攪拌」の様子から(すくも完成まで)

他にも(カ)で見られる、温度計の見方が分からない、すぐに温度が下がってしまうという困り感や、(キ)の葉の発酵による「きのうよりあつくなってる」という温度変化への気付き、(ケ)の「くさいなあー」「バケツがあせかいてる」という発酵によるにおいや状態の変化は、すべて体験を通した結果としての気付きと位置付けることができるのではないだろうか。また、合わせて(ク)のようにグラフの作成に意欲的に取り組む姿は体験したことをまとめていきたい、みんなに知らせたいという目的をもった好奇心・意欲であると考えられる。

以上を踏まえると、表2-6のような「好奇心・意欲」「気付き」「学び」の往還過程として表すことができる。この表を見ると、「好奇心・意欲」「気付き・学び」が行きつ戻りつしながら展開している。その中でも、特に新しいことに対する「気付き・学び」が次の好奇心・意欲に繋がっていることが窺える。

7 事例7『藍建て』

(1) 事例7は、12月5日からの「藍建て準備」から12月9日の「藍建て」に関する事例である。

①12月5日からの「藍建て準備」の様子から  
すくもが完成し、藍の染め液を作る「藍建て」の工程になった。鹿の糞のように丸く固まった「すくも」を手を目を輝かせ期待感たっぷり子どもたちの姿がある。(ア)「つぎはどうするの?」「もうあいだてできる?」と子どもたちは保育者に質問してくる。そのような状態を受け、保育者は指導役の藍同好会のHさんと連携し藍建ての日を決めた。藍建て当日はHさんご夫妻も来園して下さることになり、子どもたちはより喜んだ。

藍建ての3日前から事前準備を行わなければならない。90ℓのポリバケツで染め液を作るには「すくも」は3.6kg必要なことになる。その量を量るためには重さを量ることが出来る「はかり」も必要となる。子どもたちは毎日の保育活動で昼食の残食チェック(残食の重さを量り記録する活動)を行っていたので、はかりの使い方はすでに知っていた。すくもの重さを量る活動になると(イ)「もうちょっとやで!」「あ!いきすぎ~(針が)」「(針が)ここまで」と教え合いながら計測していた。通常使用するはかりはデジタル式ではなく、あえて針のある旧式のものを使うようにしていた。量ったすくもはバケツに入れ、水を加えて、藍建て当日まで毎日攪拌しドロドロの柔らかい状態にしていく。

②12月9日の「藍建て」の様子から

12月9日、指導役のHさんから説明を受けながら藍建てが始まった。事前準備で泥状になったすくも

表2-6 事例6の「好奇心・意欲」「気付き・学び」の往還過程

|                         | 好奇心・意欲         | 気付き・学び         |
|-------------------------|----------------|----------------|
| ①10月21日「すくもづくり」の様子から    |                |                |
| ア                       | すくもづくりへの期待     |                |
| イ                       |                | においの変化         |
| ウ                       | 数える、拾うという自主的行動 |                |
| エ                       |                | 温度の変化(発酵による発熱) |
| オ                       | 温度計への関心        |                |
| ②その後の「攪拌」の様子から(すくも完成まで) |                |                |
| カ                       |                | 温度計の扱い         |
| キ                       |                | 温度の変化(発酵)      |
| ク                       | グラフ作成          |                |
| ケ                       |                | においの変化(発酵)     |

を90ℓのポリバケツに移し、子どもにとっては危険な薬剤である炭酸カリウムはHさんが入れることになった。その際、注意が必要な薬剤である説明をする保育者を真剣な表情で見つめる子どもたちの姿が見られた。その後60℃のお湯をポリバケツの約7分目まで入れ、すくもを良く溶かすために攪拌していく。手本として見せてくれていたHさんが子どもたちに「かき混ぜてみる？」と聞くと、(ウ) すぐさま「やりたい!」「まぜたい!」と子どもたちが声を上げた。全員がやりたいと言うので順番に行くことになった。Hさんからかき混ぜ棒を手渡され早速チャレンジしてみる。手本としてHさんが行っていた様子から簡単そうに思っていた子どもたちだが、実際にやってみると、(エ) 「おもたい」「むずかしい」という感想が返ってきた。子どもたちにとって攪拌は重く、コツがつかみにくいようであった。活動は全員が体験し攪拌の難しさの共有も図れた。

続いて水酸化カリウム(石灰)540g、ブドウ糖360g、強力粉90gをお湯で伸ばした糊状にしたものを良く攪拌しながら液量が90ℓになるまで40℃のお湯を足していく。(オ) 事前に子どもたちと材料を量り準備していたため、材料の名前やグラム数を子どもたちも覚えていた。この作業は微妙な温度管理と時間の関係、またスペース上の問題から指導者のHさんと保育者が中心行的に行った。その作業工程を見ていた子どもから(カ) 「なんでいれんの?」という質問が聞かれた。「これは藍の栄養だよ、みんなもご飯食べるだろ?」「藍も生きているからね」という答えが返ってきた。子どもたちは(キ) 「へー! えいようなんや」と少し驚いたようなリアクションをして

いた。最終の仕上げとしてポリバケツを電気毛布でくるみ電源を入れる。つまり藍建て後は一定の温度管理をしながらその状態を維持し続けたいといけないのである。

次々に栄養を入れ攪拌する中で、ポリバケツ内の藍液を見ながら(ク) 「やってみたいなあ」と言ったり、(ケ)「あ! みどりになった!」「ちゃいろになったで!」「あわになってる!」と口々につぶやく子どもたちの様子から興味・関心、好奇心が高まってきている様子が窺えた。

藍建てが終了した時のことである。(コ) 子どもたちは、様々ことを教えてくれた指導者のHさんの指先が青色に染まっていることに気が付いた。「わ~! Hさんのて あおいで!」「しょくにんさんのてや」と言い出し、みんなが次々にHさんの手を触りだした。それは、単に手の色の確認ではなく「職人さん」に対しての憧れの眼差しであった。

(2) 事例7の考察

① 12月5日からの「藍建て準備」の様子から

(ア) 「つぎはどうするの?」「もうあいだてできる?」という気きは、次の活動に対する好奇心であり、新たな出発点となる好奇心や意欲であるといえる。意欲があるため、次の量るという(イ)の活動からの気付きも多く、子どもたちの声が響いている。

② 12月9日の「藍建て」の様子から

(ウ)の「やりたい!」「まぜたい!」や(ク)の「やってみたいなあ」などの「~したい」という気きは好奇心や期待に満ちた意欲の高さが感じられ、目的をもった好

表2-7 事例7の「好奇心・意欲」「気付き・学び」の往還過程

|   | 好奇心・意欲                | 気付き・学び    |
|---|-----------------------|-----------|
|   | ①12月5日からの「藍建て準備」の様子から |           |
| ア | 次の活動の関心へ              |           |
| イ |                       | はかりの扱い    |
|   | ②12月9日の「藍建て」の様子から     |           |
| ウ | 「やりたい」と挙手する姿          |           |
| エ |                       | 攪拌方法      |
| オ | 薬剤・量の知識               |           |
| カ | 薬剤についての疑問             |           |
| キ |                       | 薬剤の知識     |
| ク | 「やってみたいなあ」            |           |
| ケ |                       | 藍液の色の変化   |
| コ |                       | 藍の色に染まった手 |

奇心や意欲と捉えられる。(エ)の「おもたい」「むずかしい」や(ケ)の「あ!みどりになった!」「ちやいろになったで!」「あわになってる!」という言動は、藍の特性である発酵や酸化による体験から生まれたものであり、結果としての気付きや学びといえる。藍液の色が変わったり、液が泡立ってきたりする初めての体験から驚きや発見は新鮮で、すぐさま子どもたちの言葉となって溢れて出てくる。(オ)の藍建て準備や(カ)の「なんでいれんの?」という疑問を投げかける様子は、活動に対しての前向きな目的をもった好奇心や意欲であると捉えられる。指導役のHさんから聞いた薬剤の説明に(キ)では「へー!えいようなんや」と新たな知識を得ていることがわかる。消毒と腐敗防止の目的も含んでいるが、あえて子どもたちが理解しやすい「栄養」という言葉で伝えてくださったことで、子どもたちにとって藍がより身近なものになったといえる。

以上を踏まえると、表2-7のような「好奇心・意欲」「気付き・学び」の往還過程として表すことができる。この表からも、「好奇心・意欲」「気付き・学び」が往復しながら活動展開していることがわかる。

## 8 事例8『藍の攪拌』（毎日の様子を踏まえて）

(1) 事例8は、藍建てを行った12月9日から卒園する3月21日まで、毎日行った藍の攪拌における事例である。この事例は、藍の攪拌を行う子どもたちの当番活動の様子を踏まえ、とくに心を動かされながら当番活動を行っている際の特徴的な様子、その時々気付いたことや好奇心・意欲がよく見られている場面を捉えている。約3か月半の様子をかなり省略して事例としているため、本来は日々の往還過程を捉えたほうが良いことも、ここでは大きな流れの中での往還過程の様子として示している。

藍建てをした翌日から毎日の攪拌が始まった。園が休みの時以外は基本的に子どもたちが攪拌を担当した。藍の当番になると子どもたちはウキウキと嬉しそうである。(ア)回数を重ねるごとにグループ内で子どもたちが自然に役割分担を行うようになった。温度計を出して測る担当、砂時計で3分の時間を計る担当、担当以外の子どもも仲間がする様子を真剣に見つめ、「もうちょっとやで」などと言い合い他人事にはなっていない。(イ)始め難しい、重いと言っていた攪拌も、腰を入れながら踏ん張り、上手に掻き混ぜることができるようになっていた。(ウ)「1、2、3、4…10」と攪拌回数もみんなで数えて交代

する。次第に藍液の色が濃く変化して、ポリバケツの淵には濃い藍色が付着してきた。Hさんが教えてくれた「藍の華」も見られるようになり、活動を通して(エ)子どもたちは「藍の華」というものとその言葉を知った。(オ)藍のにおい、藍液の色、泡の出方、そして何より藍の華の状態を見て、「あわがあおい」「きょう あいさんげんきやな」「あいのにおいや」「いいにおい」と状態の変化に気付き、口々に伝えあうようになった。攪拌当番の子どもたちから聞く藍の状態の報告も、みんなが体験しているからこそそのイメージの共有も図ることができ、一人の気付きや発見がみんなの発見や喜びに繋がっているといえる。

また、よりクラスで共有を図るため、すくもづくりで行った(カ)グラフと表づくりを攪拌時にも行うことを保育者が提案すると子どもたちは大賛成し、手慣れた様子で温度を表に書き入れる姿が見られた。

## (2) 事例8の考察

当番の回数を重ねるごとに(ア)のように子どもたち自身が役割分担を決めるようになった。これは、意欲の表れであるといえる。(イ)の攪拌も初めてチャレンジした時は「おもたい」「むずかしい」と言っていた子どもたちが、このときには、攪拌の姿も様になっている。繰り返し体験を重ねることにより、出来なかったことができるようになったり、より精度を高め上達していったりすることで自信が高まっていることが窺える。

また、子どもたちが自ら(ウ)のように数を数え順番に行えるルールを作り、自分たちでそのルールを守っていくなど活動への意欲がみられる。(エ)の「藍の華」という言葉も体験するからこそ出合えた言葉といえる。(オ)で見られる「きょう あいさんげんきやな」「あいのにおいや」という子どもたちの気付きの言動は驚かずにはいられない。藍のにおい、藍液の色、泡の出方、藍の華を見て、藍の状態がわかるというのである。これは、同じように体験を重ねている保育者も感じており、子どもたちが口先だけで言っていることではないことがわかる。これは、継続して取り組んだからこそ味わえる、結果としての気付きや学びであるといえるのではないだろうか。

そして、一見面倒くさそうに見えるグラフ作成においても、以前の経験で得た自信と取り組みに関する好奇心・意欲の表れから、積極的に取り組む姿が見られたのである。

このように「好奇心・意欲」「気付き・学び」が繋が

表2-8 事例8の「好奇心・意欲」「気付き・学び」の往還過程

|   | 好奇心・意欲       | 気付き・学び       |
|---|--------------|--------------|
| ア | 自主的な役割分担     |              |
| イ |              | 攪拌の上達        |
| ウ | 仲間と順番のルールを作る |              |
| エ |              | 藍の華という言葉を知る  |
| オ |              | 藍の状態の変化への気付き |
| カ | グラフづくり       |              |

合って、また再び出発点となる。充実した繰り返しの活動によって活動がより広がりや深まりを増してきていることがわかる。

以上を踏まえると、表2-8のような「好奇心・意欲」「気付き・学び」の往還過程として表すことができる。この表においても、「好奇心・意欲」「気付き・学び」が往還過程を辿りながら活動が展開していることが窺える。

### 9 事例9『藍染』

(1) 事例9は、12月17日に出来上がった藍の液で行う藍染の活動事例である。

毎日の攪拌で(ア)「もー、あいぞめできるんちゃう？」と子どもたちが言い出した。初の藍染に来てくださったHさんご夫妻に、子どもたちは毎日の攪拌の様子や温度、気付きを記録した表を見せながら(イ)「あおいせんがみえてん!」「ちゃいろくなつてん」「あんなー、こんぶのにおいがしてん」と自分たちが発見したこと、驚いたことなどを口々に話していた。自分たちがその活動に取り組んできたからこそ話すことができる内容であった。子どもたちも満足気である。

白い木綿の布を手にする子どもたちは(ウ)「あいぞめ、あいぞめ」と鼻歌を歌い期待感を隠せずにはいられなかった。まず布を水で濡らし軽く絞ったら準備完了である。布を広げて持ちそっと染め液の中に布をつける。(エ) 摘まんでいる布の場所も染めるように染め液の中で指の位置を移動させていく技も慎重に取り組んでいる。そんな中、時折布はぷっくりと上に浮かび上がってくるが、空気中に布が出てしまうと色むらの原因となってしまう。(オ)「あかん みえてきた」と染め液から布を出さないように注意しながら3分間、子どもたちは染め液を見つめながら真剣に染めを行った。染め液に手をつけながら(カ)「あったか〜い」ととろけるような表情を見せる子どもたちがいた。染め液は茶色でとろりと

して温かい。素手で染めをするからこそ味わえることである。

3分が経過して、子どもたちはそっと布を染め液から持ち上げてみる。茶色の染め液から上げた瞬間布はやや緑っぽい色をしているのだが、空気に触れた途端青色に変化していく。これが酸化である。生きている藍の染め液だからこその変化を子どもたちは目の当たりにする。(キ)「わあー!あおくなつた」「きれい!あおいろにかわつた」みんなその驚きと感動を口々に言い合う姿が見られた。よく空気に触れさせ酸化した後は水ですすぐ。そうすることでより鮮やかな青色が浮かびあがる。「ちゃいろからみどり、あおにかわつた」「まほうみたいやな」とぼつりとつぶやく子どもに、うん!うん!と頷いて共感する子どもたちの姿があった。

綺麗に染まった布を干している時、子どもたちは(ク)「あおくなつた!」「しょくにんさんのてやで〜」と自分の指先や爪が青色に染まっていることに気付いた。とても嬉しそうで手を洗いたがらない姿も見られた。憧れていた指導者Hさんの手と同じ、(ケ)職人さんの手を嫌がる子どもは一人もいなかった。誇らしく、自慢げに他クラスの仲間や保育者に見せにまわる様子は藍染をやり遂げた自信に満ちあふれていた。

(2) 事例9の考察

この事例では、最終目的であった「藍染」への期待感が頂点に達していることが窺える。

(ア)「もー、あいぞめできるんちゃう？」という呟きや、(ウ)「あいぞめ、あいぞめ」と鼻歌を歌う姿から、目的をもった好奇心・意欲の高まり感を窺い知ることができる。自ら発信する言葉、全身での表現は、まさに心を動かし・心を動かされていることによるものではないかと推測される。(エ)での染めむらをなくす方法を知ったことで、実際(オ)のようにむらなく染めるため

表2-9 事例9の「好奇心・意欲」「気付き・学び」の往還過程

|   | 好奇心・意欲       | 気付き・学び        |
|---|--------------|---------------|
| ア | 藍染への期待       |               |
| イ |              | 体験を通じた発見      |
| ウ | 鼻歌、藍染への期待    |               |
| エ |              | 染めむらをなくすための方法 |
| オ | むらを作らないための注意 |               |
| カ |              | 藍液の温かさ        |
| キ |              | 藍の酸化          |
| ク |              | 自分の手が青色に染まる   |
| ケ | 手が汚れることの誇らしさ |               |

に工夫する姿は、綺麗に藍を染めたいという目的をもった意欲の表れであるといえる。藍染に至るまでの(イ)や(カ)(キ)の藍染工程にみられる藍ならではの特性である酸化という化学変化の不思議に触れ、様々な気付きが生れたことがわかる。取り組んだからこそその気付きや学び、新たな知識を習得したからこそその気付きや学びが再び好奇心へと繋がっていることがわかる。そして、憧れであった(ク)の職人さんの手になれたことは、子どもたちにとって誇らしいがんばった証として映っているのではないだろうか。通常汚れに対して敏感な子どもも、この職人さんの手は嫌がることなくあったというのも、この取り組みに対する意欲の表れといえるのではないだろうか。

以上を踏まえると、表2-9のような「好奇心・意欲」「気付き・学び」の往還過程として表すことができる。この表からも、「好奇心・意欲」「気付き・学び」活動が展開する中で、往還し関わり合っていることがわかる。

#### IV 全体的な考察

「藍の種蒔きから藍染までのあゆみ」の9つの実践事例を、表1の分析カテゴリーを用いて分析を行ってきた。ここではそれらを総合的に考察していく。

##### 1. 「好奇心・意欲」「気付き・学び」の往還過程について

前述の各事例の分析と考察から明らかになったことを次の6つに整理する。

(1) 素朴な気付き・好奇心から具体的な気付き・好奇心へ  
 藍という植物の生長と特性に継続的に関わることによって、素朴な興味や好奇心から探究心が芽生え、思いが高まることで、少しずつ具体的な疑問や目的意識を持つようになることがわかった。当初は事例1の「あおい

ろないやん」「あいつどこにあるん?」という単純に見える現象をとらえた気付きや好奇心だったものが、生長し変化していく藍に継続的に取り組むことで、事例4の「なんでみどりののはっぱだけいれんの?」、事例9の「まほうみたいやな」という気付きや好奇心が具体的な疑問や表現になってきていることが窺える。つまり活動が展開していく中で「つぎはこうしたい」「もっと〇〇したい」という思いの高まりが好奇心や意欲の質の広がりにつながっているといえる。

##### (2) 試行錯誤や工夫が新たな気付きや学びへ

初めは見たまま・感じたままの気付きも、活動を重ね、試行錯誤したり、工夫したりする中で、「おもしろい」「たのしい」「わかった」というような新たな気付きや学びに繋がっていくことがわかった。松本(2009)の「気づく・試す・考える遊びを支える援助」によると、「①幼児が対象にくり返し関わることでできる状況をつくること」「②新たな気づきや意欲、イメージが生み出される状況をつくること」「③試行錯誤できる環境が保障されていること」「④気づきや試しが確かめられ、さらなる疑問点や探求心を促すこと」ということが大切であると述べている。まさに藍の継続的な取り組み過程は、子どもたちが繰り返し関わり、新たな気付きや意欲が生み出されて、さらに気付きが確かめられていくような展開になっていたと考えられる。

##### (3) 「好奇心・意欲」「気付き・学び」は往還することで広がる・深まる

事例を基にした「好奇心・意欲」「気付き・学び」の往還図によると、どの過程においても「好奇心・意欲」「気付き・学び」が一方向の筋道ではなく、往還しながら活動が展開していることがわかった。一つのきっかけから

好奇心・意欲が芽生え、活動していくことで、気付き・学びが生まれる。その気付き・学びによって新たな好奇心・意欲が芽生えてくる。このように活動が螺旋を描くように往還していくことで、活動の質が広がり、深まってきたといえる。

#### (4) 継続した取り組みから愛着へ

継続した取り組みにより、植物に対しての愛着が湧き、高まってきていることがわかった。事例の中で、始めは藍のことを「あい」と言っていた子どもたちが、事例が進むにつれ「あいさん」と言うようになってきている。また、水やりでは「おぼれないように」、生長する藍に対して「せまくてかわいそう」というような言葉も聞かれている。秋田(2014)は、「愛着が生まれるには繰り返しかかわる持続性が大切である」と述べている。このように一年もの間、藍という一つの素材を通して継続的に関わっていくことで、藍に名前を付けたり、仲間のように心配したりするような愛着が形成されてきたと思われる。そして、愛着が生まれるからこそ、より好奇心や意欲への高まりに繋がっていると考えられる。

#### (5) 気付きを共感しあえる仲間や保育者の存在が、より大きな喜びや学びに繋がる

活動を通した気付きは仲間や保育者と共感し合うことで、より大きな喜びとなり、自分一人では気付けないことにも気付くような大きな学びになることがわかった。「好奇心・意欲」「気付き・学び」の往還過程とそのことを共有する仲間の存在については、瀧川(2013)が「個人の気付きや発見が他児にも広がり疑問を一緒に解決していく中で、行きつ戻りつしながら、何度も繰り返したりしている。その中で学びが少しずつ洗練されていくのではないかと考えられる」と述べている。例えば、事例3においても見られたように、「葉が枯れている」「茎に穴が開いている」ことを発見した子どもが他児に気付きを伝えている。伝えたことで他児にとっても気付きとなり、活動の共有・共感ができている。そして生まれた「なぜ?」という疑問に向き合い、「虫の発見」という解決に繋げている。このような姿からも、気付きや学びが深まっていくためには、仲間や保育者の存在が重要であり、その体験が行きつ戻りつする往還過程を辿ることで気付きや学びの質が広がり、深まっていくと考えられる。

#### (6) 活動の中心には常に「心を動かす・心を動かされる」という情動や心情が存在する

継続的に子どもたちが好奇心や意欲をもって活動に取

り組むには、それぞれの過程において常に心を動かす情動や心情が存在していることが重要であることがわかった。「教育・保育要領」で「心を動かされる体験が次の活動を生み出す」と位置づけられているように、「好奇心・意欲」「気付き・学び」は、どちらも子どもにとって「心を動かす情動や心情」であり、それらが行きつ戻りつしながら往還的に繰り返されるからこそ、長期に渡る活動が継続していると考えられる。このように継続的に長期にわたって活動が繋がっていくためには、子どもたちが、素材や活動に対して、「わあーすごい!」「なんでやろう?」「みてみて!」と心を動かしながら様々な情動や心情が湧いてくる体験が重要であるといえる。

このように「好奇心や意欲」「気付き・学び」が往還過程を辿りながら、仲間と共に活動が展開していくことで、その活動の質が広がり、深まりを増していくことがわかった。さらにこの過程は「主体的・対話的で深い学び」と言えるのではないかと考えられる。

## 2. 「好奇心・意欲」「気付き・学び」における保育の展開モデル

本研究で明らかになった「好奇心・意欲」「気付き・学び」の往還過程を踏まえ、保育の展開を図式化すると、図1のように整理することができる。平面図では十分に表現しきれないが、次の5点を意識して図式化している。

- (1) あるきっかけから「好奇心・意欲」が生まれ、遊び・活動することで「気付き・学び」がその結果として生まれてくる。そして、その気付き・学びから、新たな「好奇心・意欲」へと繋がるといったサイクルになっていること。
- (2) 「好奇心・意欲」「気付き・学び」の関係性は、互いにバネのように、関係し合い、関わり合いながら、展開・発展していくものであること。
- (3) 「好奇心・意欲」「気付き・学び」が往還しながら活動が展開していくことにより、活動の質が広がりや深まりを増し、継続した取り組みとなること。図1では、AからA'に、A'からA''にという表現で質の深まりを表現している。事例1の「あおいろないやん!」という素朴な気付きから、どうしたら青色が作れるのかと調べ、「あいがあおいろになるってー」と次へ進展する気付きへと結びついている姿がその例として挙げられる。また活動展開することによって新たに芽生える質の広がり



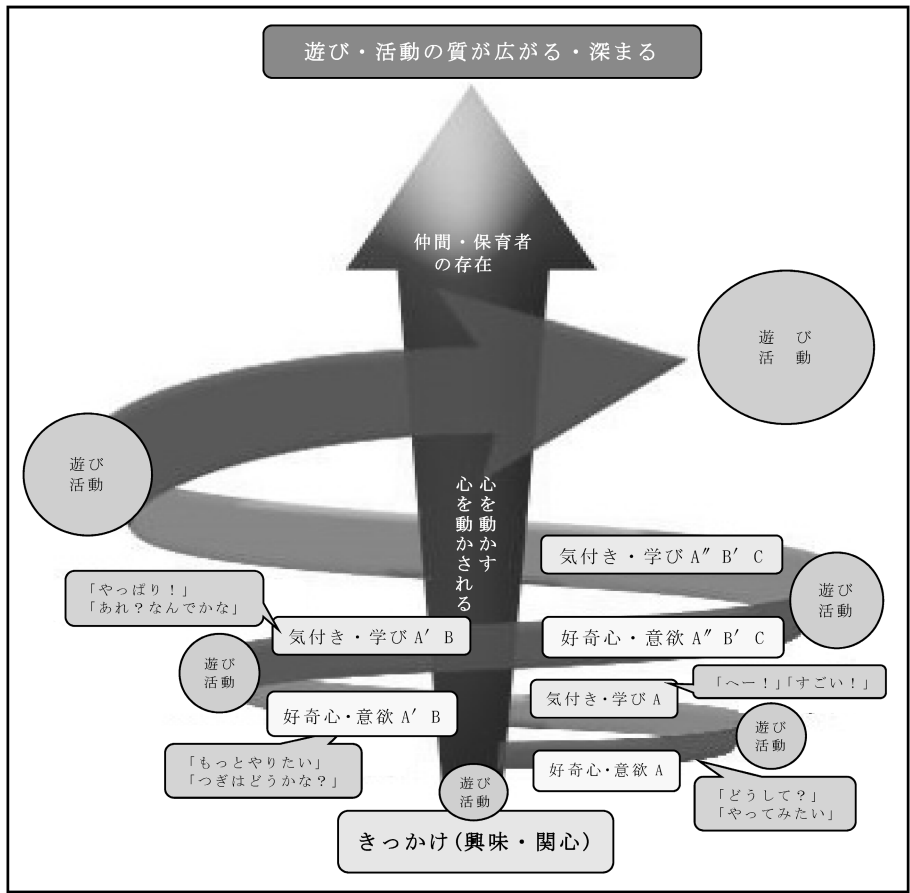


図1 「好奇心・意欲」「気付き・学び」における保育の展開モデル

をB、Cとして表現しているが、これは事例2でもみられるように、苗を定植するという活動から、50cmという数字や単位への気付きや好奇心へと結びついていることが例として挙げられる。

- (4) 活動が展開されていく中には、常に共感しあえる仲間や保育者の存在があり、自分以外の視点が加わることで自信に繋がったり、仲間の模倣により自分だけでは気付けなかったことに気付いたりするなど、質の広がりや深まりに繋がっていること。
- (5) 活動が展開されるには、中心に「心を動かす・心を動かされる」という情動や心情が存在していること。

### 3. 仮説の検証

事例を基にしたIV - 1、2の結果を踏まえ、長期にわたって活動が展開していく過程において、子どもたちの「好奇心・意欲」「気付き・学び」の関係は直線的な一方向の筋道ではなく、行きつ戻りつしながら進む往還過程を辿りながら展開していた。また、往還過程を辿る中

で情動や心情が湧いてくる体験が絡み合っ活動の質に広がりや深まりが生まれていた。以上の結果から仮説は妥当であるといえる。

### 4. 今後の課題

本研究により、「好奇心・意欲」「気付き・学び」の往還過程を辿ることで、活動の質が広がりや深まりを増しながら継続していくことがわかった。本研究の素材である『藍』は生長・活動展開の過程において酸化・発酵という特性もあり、素材自体の魅力が大きいといえる。他の自然素材や遊びにおいても同様のことがいえることを裏付けるためにも藍以外の一般的な活動事例と比較分析することが必要であるといえる。また、継続した活動を行うには共歩きの保育者の存在が欠かせないこともわかった。今後は活動を支えるための保育者の視点からの分析も行っていきたい。

### 文献

秋田喜代美 (2000) 『知をそだてる保育』 ひかりのくに株式会社、pp.31.  
 秋田喜代美 (2014) 『保育のおもむき』 ひかりのくに株式会社、

pp.29.

神長美津子（1998）『保育の基本と環境の構成－指導計画の考え方・たて方』ひかりのくに株式会社、pp.32-40.

松本信吾（2009）「遊びの中の学びをはぐくむ保育」、小田豊・青井倫子編『幼児教育の方法』北大路書房、pp.41-57.

内閣府・文部科学省・厚生労働省（2017）『幼保連携型認定こ

も園 教育・保育要領』フレーベル館、pp.11.

内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館、pp.99-100.

瀧川光治（2013）「保育場面の幼児の探索・探求的な活動における「学び」の分析～思考の過程を経て獲得していく学びとその育ち～」関西国際大学研究紀要 第14号、pp.108-110.

## In the Process That 5 Year Old Children Grew Japanese Indigo (AI) and Became Dyeing with Indigo, How Their “Curiosity/Motivation” Intertwine in Association with “Realization/Learning”.

Miyuki Tanaka

*Osaka University of Comprehensive Children Education Graduate School*

This research analyzed 5-year old children's behavior in various activities about Japanese indigo (AI). The behavior of children were analyzed using two categories “curiosity/motivation” and “realization/learning”. As a result, I found out the following three points: First, that activities are developing while “curiosity/motivation” and “realization/learning” intertwine with each other. Second, in that activities, children often meet events that move their minds. As a result, that activity will continue. Third while children are acting, it is thought that improving the quality of activities by intertwining “curiosity/motivation” and “realization/learning” with each other and moving their minds.

Key words : curiosity, realization, learning, spread, deepen